

## 保育者養成校の学生が抱く子どもに対するダンス指導不安と自己開示、他者受容との関連

福武幸世<sup>1)</sup>\*・芝崎美和<sup>1)</sup>・渡部昌史<sup>1)</sup>

1) 新見公立大学健康科学部健康保育学科

(2022年9月21日受付、11月16日受理)

本研究では、保育者養成校の学生50名を対象に自記式質問紙調査を実施し、就学期前の子どもに対するダンス指導の不安感の構成要素と、ダンス指導における不安感と自己開示、他者受容の関連について検討した。その結果、保育者養成校の学生におけるダンス指導不安の構成要素として、第Ⅰ因子「幼児への動機づけ、指導方法に対する不安」、第Ⅱ因子「自分自身のダンス技術に対する不安」、第Ⅲ因子「自分自身の教材活用、指導力に対する不安」、第Ⅳ因子「幼児の表現力、主体性の誘発に対する不安」の4つの因子が確認できた。ダンス指導不安と各自己開示レベルについては、趣味や最近楽しかった出来事などの表層的な自己開示を行う人は、第Ⅰ因子「幼児への動機づけ、指導方法に対する不安」、第Ⅱ因子「自分自身のダンス技術に対する不安」と有意な負の相関関係が認められた。他者受容とダンス指導不安の各下位尺度得点については、第Ⅰ因子「幼児への動機づけ、指導方法に対する不安」、第Ⅱ因子「自分自身のダンス技術に対する不安」、第Ⅳ因子「幼児の表現力、主体性の誘発に対する不安」について、低群の得点が高群の得点と比べて高かった。以上より、ダンス系科目担当者は、学生のこれらの特性を十分に理解した上で、授業の展開を考えていく必要がある。(キーワード) ダンス指導不安、保育者養成校の学生、就学期前の子ども、自己開示、他者受容

### 1. 背景と目的

保育現場では、日々の活動の中に、音楽を聴く、絵本を見る、つくる、かく、歌う、音楽や言葉などに合わせて身体を動かす、何かになったつもりになるといった表現活動が展開されている<sup>1)</sup>。表現活動には、子どもたちの内面のイメージや感情を豊かにし、さらに表現を通して、保育者や友達とコミュニケーションを図り人間関係を築くという意義がある。よって、この時期の表現活動は、就学期前の子どもたちの内面の成長にとって重要な活動であるといえる。

保育や教育では様々な表現活動が行われているが、その中の1つに音と身体を介したダンスに関連する表現活動がある。音楽やダンスには、「一定の速度や強弱の関係が繰り返される律動的なリズム」「内臓活動には揺らぎのある生命リズム」「自然現象におけるリズム」という流れや繰り返しが<sup>2)</sup>、子どもたちは、様々なリズムの響きや音に自然に身体で反応し、それぞれ感じたままに身体で表現する。また、音楽のリズムに合わせた子どもの自然な表出行動は、他者に伝わり、模倣され、集団の表現活動へと拡がり、こういった一連の経験は、子どもにとって集団の中で自己表現する喜びの原初的体験となる<sup>3)</sup>。したがって、音と身体を介した就学期前のダンス活動は、各子どもたちの内面で感じる音やリズムのイメージを生み出し、やがて、

集団の中で他者との調和を作り出し、人間関係を築くことができる表現活動の1つである。保育者は、子どもたちの内面を育むために、集団の遊びの中で、音やリズムのイメージを全身で楽しみながら表現できるダンス活動を行うことが望まれる。

保育者養成校では、子どもの表現活動を展開していくための知識や技能の習得、実践する力を養う授業科目として、保育内容「身体表現」などが配置されている。保育者養成校の学生は、ダンス系に関する授業を通して、保育現場で表現活動が出来る実践力を磨いていく。ダンス系科目担当者は、学生が保育現場で不安なく、自信をもってダンス活動の指導が展開出来るように教授していかなくてはならない。そのためには、学生がダンス指導に対してどのような不安を抱えているのか、その不安にどのような要因が関連しているのか把握しておくことは、教授内容の質を高める上で大切である。これまでのダンス指導の先行研究では、福武らがダンス経験の無い保育学生は、自分自身がダンスに対して苦手意識を抱えていることを報告している<sup>4)</sup>。また、宮下は、ダンスや表現能力についての自己評価が低い学生のグループでは、子どもにダンスや表現を教えることはやりたくないとする学生が多く、子どもと一緒に踊ることも自信のない学生が多いことを報告している<sup>5)</sup>。これらのことから、ダンス指導には、ダンス経験の有無や、表現能力についての自己評価が影響を与えている

\*連絡先：福武幸世 新見公立大学健康科学部健康保育学科 718-8585 新見市西方1263-2

ことが明らかにされている。しかし、就学期前の子どもに対するダンス指導の不安について調査された報告は少なく、更なる検討が必要である。

保育者養成校の学生は、ダンス系の授業において、「創る」「踊る」「観る」の探求型学習の体験を通して、「自己」「他者」を意識するようになる<sup>6)</sup>。これは、自己を開示する自己表現と他者がそれを受容する<sup>7)</sup>といった、ダンス系の授業特有のものである。表現の手法に着目すると、ダンス系の授業では、自己をさらけ出し、非言語的手法で自分自身を表現することと、他者を受け入れて他者の動きを共有するといった手法が多用されている。このような非言語的手法を用いて自己を表現する程度と、相手の表現をいかに受け入れるかといった他者を受容する程度は、保育学生のダンスに関する認知だけでなく、ダンス指導における認知にも影響する可能性が高い。なぜなら、ダンスは自己表現と他者受容によって成り立つため、学生はダンスの特性を理解した上で、保育現場の子どもの指導を考えていかななくてはならないからだ。しかし、保育学生は保育現場に行く機会や子どもにダンスを教える、一緒に踊るといった経験がほとんどないため、保育現場の想定が難しいと考えられる。

したがって、本研究では、「自己を表現する力」と「他者の表現を受け入れる」といったダンス系授業の構成に密接にかかわる2つの能力とダンス指導に関する認知との関連性について検討する。また、ダンス指導に関しては、指導に対する不安に着目する。本研究では、山口らのダンスの授業実践に伴って抱く不安を用い<sup>8)</sup>、就学期前のダンス指導に対して抱く不安を「ダンス指導不安」と定義する。自己を表現する力に関しては、自己開示を取り上げる。自己開示とは、他者が知覚できるように自分自身を表すことである<sup>9,10)</sup>。特に女性の場合は、青年期前期では母親に対する自己開示が最も高いが、青年期後期になると、最も高い自己開示を示す相手は同性友人になる<sup>10)</sup>。青年期の自己開示は孤独感とも関連しており、孤独感の中でも、人と人とは分かり合える、共感しあえると認識するという共感性の高い者ほど自己開示の程度が高いという榎本らの研究知見<sup>11)</sup>からも、他者に対して安心して自己を表すことのできる者は、他者との関係性についてのポジティブな認知に基づき、ダンス指導においても不安感などネガティブな感情を認識しにくい可能性がある。

他方、他者の表現を受け入れる力については、他者受容力に焦点をあてる。他者受容とは、「ありのままの自己を受け入れる」<sup>12)</sup>という自己受容と対置する能力であるが、自己受容と相関関係にあることがいくつかの研究で指摘されており<sup>13-15)</sup>、適度な自己受容、他者受容を持つことが、社会適応や円滑な人間関係の構築には重要であることが確認されている。このうち、他者受容は、「他者の内面やメッセージを受容する」という、ダンス系授業の構成の一端

を担う能力であり、他者の主張や言葉を柔軟に受け入れられる者ほど、ダンス指導においてもネガティブな感情を認知しないと予測される。

以上を踏まえ、本研究では以下の2点について検討を行う。第1に、保育者養成校の学生を対象に、就学期前の子どもに対するダンス指導の不安感の構成要素を明らかにする。第2に、ダンス指導における不安感に、自己開示と他者受容といった特性がどのように関連するかについて明らかにする。

## II. 研究方法

### 1. 調査対象者

対象者は、2021年にA大学の保育者養成校に在籍する1年生50名である。1年生を対象とした理由は、まだ身体表現（ダンス）に関する授業を本格的に受けておらず、その時点でどのようなことに不安を感じているのか把握するためである。

### 2. 手続き

自記式質問紙による一斉調査を実施した。回収率は100%であった。

### 3. 質問紙の構成

質問紙は、属性に関する項目、ダンス指導不安尺度、自己開示尺度、他者受容尺度で構成された。本研究で用いた質問項目ならびに尺度は、以下の通りである。

#### 1) 属性

属性に関しては、性別、年齢、ダンス経験の有無の3項目を調査した。

#### 2) ダンス指導不安尺度

ダンス指導不安尺度は、山口らが、中学校教員等を対象に作成したダンス指導不安尺度<sup>8)</sup>を保育者用に改訂して調査した。改訂にあたり、現職の保育士14名に対して予備調査を行った。具体的には、学校現場での「生徒に対するダンス指導の不安項目」46項目について、「生徒」と表示している個所を「幼児」に置き換え、項目が幼児教育に該当するかどうか調査した。各項目において60%以上該当と回答した場合、幼児教育に適している項目と判断した。最終的に26項目が精選された。

#### 3) 自己開示尺度

自己開示については、丹羽らの自己開示尺度<sup>16)</sup>を採用した。この尺度は、全24項目から構成されており、各項目について、「同性の初対面の人に対してどのくらい詳しく話すか」という教示のもとに、「(1) 何も話さない」「(2) 詳しく話さない」「(3) あまり詳しく話さない」「(4) どの

らともいえない」「(5) やや詳しく話す」「(6) 詳しく話す」「(7) 十分に詳しく話す」の7件法によって評定するよう求めた。また、自己開示のレベルは、「趣味(レベル1)」「困難な経験(レベル2)」「決定的ではない欠点や弱点(レベル3)」「否定的性格や能力(レベル4)」の深さが異なる4つのレベルに分かれている。

#### 4) 他者受容尺度

他者受容については、上村の他者受容尺度<sup>10)</sup>を採用した。この尺度は、全13項目から構成されており、各項目について、「(1) 全くあてはまらない」「(2) あてはまらない」「(3) あまりあてはまらない」「(4) どちらともいえない」「(5) ややあてはまる」「(6) あてはまる」「(7) 全くあてはまる」の7件法によって評定するよう求めた。

#### 4. 分析方法

統計ソフトに使用したソフトは、SPSS Statistics 25である。ダンス指導不安は、探索的因子分析を実施し、因子構造の検討をした。その上で、各因子と自己開示レベル、他者受容との関連性について、積率相関関係の分析およびt検定を用いた分析を実施した。統計的有意水準はいずれも5%未満とした。

#### 5. 倫理的配慮

調査にあたり、調査対象者に対して、調査への回答は任意であること、回答の辞退または途中で協力撤回は可能であること、研究への参加・不参加による成績への影響や不利益を被ることは一切ないことを説明した。回答するアンケートの表紙に本研究に対して同意するか否かのチェック記入を求め、調査を開始した。本研究は、新見公立大学倫理審査委員会において承認を得た(承認番号:220)。

### III. 結果

#### 1. 調査対象者の属性

調査対象者の属性の内訳は、ダンス経験者8名(うち男性1名、女性7名)、ダンス未経験者41名(うち男性2名、女性39名)であった。ダンス経験者の年齢は、18歳5名(うち男性1名、女性4名)、19歳3名(うち男性0名、女性3名)であり、ダンス未経験者の年齢は、18歳28名(うち男性2名、女性26名)、19歳13名(男性0名、女性13名)であった。なお、性別、年齢についてはそれぞれ1名の未回答者があった。

#### 2. ダンス指導不安の構成要素

ダンス指導不安尺度の原案26項目について、探索的因子分析(主因子法・バリマックス回転)を実施した(表1)。初期の固有値1.0を基準として、共通性が極端に低い項目の

因子を除いて、分析を繰り返した。2つの因子に高い負荷を示す1項目が削除され、固有値の減衰状況から最終的に4因子が抽出された。表1に示す通り、第I因子は、「指導」や「声かけ、振り付け」といった項目が高い負荷を示すことから「幼児への動機づけ、指導方法に対する不安」と命名した。第II因子は、「自分の技術力、体の使い方」や「自分の指導技術」などの項目が高い負荷を示したため、「自分自身のダンス技術に対する不安」と命名した。第III因子は、「教材」や「指導力、スキル」といった項目が高い負荷を示したことから「自分自身の教材活用、指導力に対する不安」と命名した。第IV因子は「幼児がダンスを楽しむこと」「幼児が自分らしさを表現すること」などの項目が高い負荷を示すことから、「幼児の表現力、主体性の誘発に対する不安」と命名した。全項目の分散説明率は70.5%であった。尺度の内的一貫性を検討するために、Cronbachの $\alpha$ 係数を求めたところ、第I因子「幼児への動機づけ、指導方法に対する不安」が0.95、第II因子「自分自身のダンス技術に対する不安」が0.93、第III因子「自分自身の教材活用、指導力に対する不安」が0.93、第IV因子「幼児の表現力、主体性の誘発に対する不安」が0.77であった。いずれも0.70以上であ

表1 ダンス指導不安の因子分析

項目	因子I	因子II	因子III	因子IV
第I因子:幼児への動機づけ、指導方法に対する不安( $\alpha=0.95$ )				
5 幼児のモチベーションの上げ方	0.84	0.35	0.18	0.22
9 オリジナリティを引き出す言葉かけ	0.77	0.24	0.1	0.14
8 導入での幼児のひきこみ方	0.72	0.27	0.09	0.07
23 幼児にニーズに合った振り付けを考えること	0.67	0.34	0.43	0.21
6 リズムに乗り切れない幼児への指導	0.67	0.16	0.37	0.20
12 経験者に対する興味のひかせ方	0.63	0.12	0.50	0.17
22 ダンスが苦手な幼児に対するアドバイス	0.61	0.23	0.31	0.35
10 集団指導の方法	0.61	0.14	0.35	0.26
24 幼児のレベルに合った振り付けを考えること	0.60	0.42	0.30	0.30
26 幼児のニーズに合った選曲	0.53	0.29	0.41	0.14
7 経験者と初心者それぞれに応じたアドバイス	0.52	0.28	0.26	0.24
第II因子:自分自身のダンス技術に対する不安( $\alpha=0.93$ )				
20 自分自身がダンスを楽しむこと	0.24	0.88	0.13	0.01
19 自分自身が振り付けを覚えること	0.27	0.83	0.22	0.01
21 自分自身の体の使い方	0.17	0.80	0.23	0.18
18 自分自身がリズムをとること	0.26	0.69	0.38	-0.04
4 自分自身が恥ずかしがらずに幼児を指導すること	0.34	0.67	0.08	0.19
第III因子:自分自身の教材活用、指導力に対する不安( $\alpha=0.93$ )				
15 自分自身のダンススキル	0.14	0.45	0.78	0.13
16 自分自身の指導スキル	0.48	0.28	0.73	0.08
17 自分自身が見本になること	0.26	0.57	0.67	0.09
14 幼児にうまく伝わる説明	0.33	0.23	0.66	0.26
13 カリキュラムの組み方	0.46	-0.03	0.62	0.41
11 ダンスの楽しさを教えること	0.46	0.33	0.53	0.36
第IV因子:幼児の表現力、主体性の誘発に対する不安( $\alpha=0.77$ )				
2 幼児がダンスを楽しむこと	0.16	0.16	0.15	0.78
3 幼児が自分らしさを表現すること	0.14	0.14	0.06	0.64
1 幼児がお互いの発表を鑑賞すること	-0.06	-0.06	0.14	0.61
固有値	13.47	2.46	1.43	1.41
累積寄与率	24.83	43.68	60.71	70.47

表2 ダンス指導不安と各自己開示レベルとの関連

		自己開示			
		趣味	困難な経験	決定的ではない 欠点や弱点	否定的性格や能力
		レベル1	レベル2	レベル3	レベル4
指導不安	第Ⅰ因子 「幼児への動機づけ、指導方法に対する不安」	-0.37**	-0.17	-0.21	-0.17
	第Ⅱ因子 「自分自身のダンス技術に対する不安」	-0.33*	-0.20	-0.19	-0.20
	第Ⅲ因子 「自分自身の教材活用、指導力に対する不安」	-0.17	-0.03	-0.14	-0.06
	第Ⅳ因子 「幼児の表現力、主体性の誘発に対する不安」	-0.26	-0.03	0.02	-0.02

\*\*p<0.01,\*p<0.05

ったことから、すべての下位尺度について、一定の信頼性が確認された。

### 3. ダンス指導不安と各自己開示レベルとの関連

ダンス指導不安と各自己開示レベルの関係を検討するために、自己開示尺度とダンス指導不安尺度の各下位尺度得点間のピアソンの積率相関係数を算出した(表2)。その結果、自己開示のレベル「趣味(レベル1)」と第Ⅰ因子「幼児への動機づけ、指導方法に対する不安」(r = -0.37, p < 0.01)、第Ⅱ因子「自分自身のダンス技術に対する不安」(r = 0.33, p < 0.05)について有意な負の相関関係が認められた。

### 4. ダンス指導不安と他者受容との関連

他者受容得点については、中央値(Med=5.23)に基づき、調査対象者を高群と低群に分けた(表3)。他者受容とダンス指導不安の各下位尺度得点については、第Ⅰ因子「幼児への動機づけ、指導方法に対する不安」(p < 0.01)、第Ⅱ因子「自分自身のダンス技術に対する不安」(p < 0.1)、第Ⅳ因子「幼児の表現力、主体性の誘発に対する不安」(p < 0.1)について、低群の得点が高群の得点と比べて高かった。

表3 ダンス指導不安と他者受容との関連

	他者受容		t値	
	低(n=26)	高(n=24)		
指導不安	第Ⅰ因子 「幼児への動機づけ、指導方法に対する不安」	5.09 (1.00)	4.10 (1.30)	3.03**
	第Ⅱ因子 「自分自身のダンス技術に対する不安」	4.26 (1.35)	3.39 (1.71)	1.99†
	第Ⅲ因子 「自分自身の教材活用、指導力に対する不安」	5.2 (1.11)	4.81 (1.62)	1.00
	第Ⅳ因子 「幼児の表現力、主体性の誘発に対する不安」	3.32 (1.30)	2.65 (1.16)	1.90†

上段:平均値、下段:標準偏差

\*\*p<0.01,†p<0.1

## IV. 考察

### 1) ダンス指導不安の構成要素

現場の保育者は、いかに子どもが楽しく充実した活動が

出来るのかを念頭に置き、子どもの素直な気持ちを表現する方法や表現を導き出す工夫<sup>17)</sup>を考えながら、ダンス・身体表現の指導を行っている。しかしながら、示範が出来ない、よいダンスの動きが分からない、指導内容が分からない、自分にダンス技術が無い、指導する他者との人間関係<sup>8,18)</sup>といったダンス指導に関する不安は多く報告されている。本研究においても第Ⅰ因子「幼児への動機づけ、指導方法に対する不安」、第Ⅱ因子「自分自身のダンス技術に対する不安」、第Ⅲ因子「自分自身の教材活用、指導力に対する不安」、第Ⅳ因子「幼児の表現力、主体性の誘発に対する不安」の4つの不安因子が確認できた。

ダンスの指導不安について、山口らは中学校の現職教員を対象に不安要素を調査し、不安の原因が「教員由来の不安」と「生徒由来の不安」に分かれることを報告している<sup>8)</sup>。本研究の第Ⅰ因子「幼児への動機づけ、指導方法に対する不安」、第Ⅱ因子「自分自身のダンス技術に対する不安」、第Ⅲ因子「自分自身の教材活用、指導力に対する不安」は、学生が指導する立場となった時に、保育者としての自分自身に不安を抱えていることを示すものであり、山口らの報告の「教員由来の不安」<sup>8)</sup>に該当する因子である。保育者養成校においては、自分自身がダンスに対して自信をもてるほど取り組んだ経験をもった学生が少なく、実際に入学間もない時期に行った実態調査からは、ダンス未経験者が8割を上回ることが示されている<sup>4,5)</sup>。つまり、「教員由来の不安」は、「教員自身のダンス経験」に起因するという、中学校の現職教員に関する山口らの見解<sup>8)</sup>は保育者養成校の学生にも当てはまり、大学のダンス系科目担当者は、ダンス指導について不安が軽減するように、段階を経た経験を積み上げていく必要があると考えられた。まずは、自分のリズムで表現を体験させて、自分自身がダンスを楽しみと感じさせる。その後、学生同士や子どもたちの日常生活の動きを観察して踊りに取り入れるなどダンス経験を積み上げていき、指導不安の軽減に繋げていく事が学生には大切であると考えられた。

第Ⅳ因子「幼児の表現力、主体性の誘発に対する不安」は、幼児がお互いの発表を鑑賞すること、幼児がダンスを楽しむこと、幼児が自分らしさを表現することの3つの要素が含まれており、山口らの示す2つの不安要素のうち、

「生徒由来の不安」<sup>8)</sup>に該当するものである。本研究の調査対象となった1年生は、保育実習等で就学期前の子どもと関わる経験がなく、子どもの実態を把握することが難しい。そのため、どのような指導が、子どもの主体性や表現力、感情を向上させ得るかをイメージすることが困難であり、こういった子どもの力を引き上げるための指導力が、自分に備わっているかを不安視する者が多かったのではないかと推察される。「生徒由来の不安」は、「ダンス指導経験」に起因している<sup>8)</sup>。よって、ダンス系科目担当者は、まず、学生に映像を用いて子どもたちの発育発達段階に応じた動きを確認させ、実際の保育現場における指導を観察することを通して、年齢にあった子どもの動きを把握させる。そして、その後、子ども役と保育者役に分かれて模擬的な実践を行い、学生同士でお互いを評価し合う模擬的な指導経験を積み重ねていき、少しでも不安を取り除いていくといった、段階的な指導技術の習得が必要であると考えられた。

## 2) ダンス指導不安と自己開示との関連

本研究では、自己開示とダンス指導不安との関係を検討するために、自己開示尺度とダンス指導不安尺度の各下位尺度得点間の相関係数を算出した。その結果、趣味や最近楽しかった出来事などの表層的な自己開示（レベル1）を行う人は、第I因子「幼児への動機づけ、指導方法に対する不安」と第II因子「自分自身のダンス技術に対する不安」をあまり感じないことが明らかとなった。他方、レベル2～4の深い自己開示とダンス指導不安の間には関連性は見られなかった。

第I因子「幼児への動機づけ、指導方法に対する不安」は、声かけや振り付けなど具体的な指導内容に関する不安であり、第II因子「自分自身のダンス技術に対する不安」は自己内省やメタ認知によって生じる不安である。これらの不安は、1年生であっても、具体的な困難状況と関連付けて喚起されうるものである。例えば、声かけや振り付けに自信がなければ、子どもの前に立った時に、どのように子どもに声をかけ、子どもを誘導するのが適当であるかわからないであろうし、ダンス技術に不安があれば、そもそも、ダンスを創作することに躓く自分を容易に想像するであろう。こういった不安感、ダンスを専門的に学ぶ以前であっても生じ得る感情である。他方、第III因子「自分自身の教材活用、指導力に対する不安」や第IV因子「幼児の表現力、主体性の誘発に対する不安」は、ダンスに関する専門的な学びを積み重ねる過程において生じるものであり、保育者養成校の学生にとってはより高次の不安感と捉えることができよう。

本研究では、このような高次の不安感ではなく、具体的な指導方法や自己のダンス技術に関する不安感との間でのみ、自己開示との関連性が見られた。第I因子「幼児へ

の動機づけ、指導方法に対する不安」とレベル1の自己開示との間に関連性が見られた原因として、親和動機があげられる。初対面の他者に対してレベル1の自己開示を行う者は、人と親密な関係を維持したいという親和傾向を持つ<sup>16)</sup>。具体的な声かけや振り付けの指導の前提には、子どもとの良好な関係性に基づくコミュニケーションがある。子どもとコミュニケーションをとることが好きで、親密な関係性を維持したいという思いに基づく指導は、一方向的で権威的な指導に比べ、子どもに受容されやすいであろう。こういった親和動機が強いからこそ、コミュニケーションを前提とした具体的な指導法への不安が高まったのだと推察される。

また、第II因子「自分自身のダンス技術に対する不安」とレベル1の自己開示との間に関連性が見られたという結果については、自尊感情という視点から説明できよう。自己のダンス技術への不安感、自己評価、すなわち自己の能力についての正確な認知に基づくものである。ダンスに関して、どこまでの技術があり、どの技術が不足しているかという、強みと弱みの捉えがあってこそ、生じる感情であるといえる。レベル1の自己開示を行う者は、自尊感情が高いという丹羽らの見解と、運動能力に関しては、身体的自己価値と身体的受容の両方が自尊感情に影響するというSanstroemらの見解<sup>19)</sup>をあわせて考えると、ダンス技術に関する身体的能力の評価は、自尊感情を媒介してレベル1の自己開示と関連したのではないかと推察される。

本研究では、同性の初対面の他者に対する自己開示の程度を調査した。自己開示における先行研究では、初対面の他者に対して、レベル2～4よりもレベル1の自己開示が多く行われることが明らかにされている<sup>16)</sup>。また、自己開示対象者が、親しい友人と初対面の人の場合では、自己開示の深さの各レベルの自己開示量に違いがあり<sup>16)</sup>、開示対象者との親密化が増すにしたがって自己開示量が増えることが報告されている<sup>11)</sup>。したがって、初対面でなく、親しい友人や、ラポールが形成された他者、ダンスに関する学びを積み上げている人を対象にしたら、第III因子「自分自身の教材活用、指導力に対する不安」、第IV因子「幼児の表現力、主体性の誘発に対する不安」との関連がみられる可能性があると考えられる。

## 3) ダンス指導不安と他者受容との関連

本研究では、他者受容得点を高群と低群の2群に分けて、他者受容とダンス指導不安の各下位尺度得点について検討した。その結果、第I因子「幼児への動機づけ、指導方法に対する不安」、第II因子「自分自身のダンス技術に対する不安」、第IV因子「幼児の表現力、主体性の誘発に対する不安」について、低群の得点が高群の得点と比べて高かった。

他者受容得点の高い者よりも低い者の方が第I因子「幼

児への動機づけ、指導方法に対する不安」得点が高かったという結果については、ふれあい恐怖という視点から考察できる。特に本研究対象の大部分を占める青年期女子に関しては、他者受容は、ふれあい恐怖のうち、対人退却や関係調整不全と負の関係性にあることが分かっている<sup>20)</sup>。対人退却傾向を持つ者は、他者と関係を持つ行動そのものに不安を抱いており、関係調整不全傾向を持つ者は、対人関係が深まるような行動をとった結果生じるであろう困難を予測しやすい<sup>21)</sup>。他者受容の程度が低い者において、声かけや振り付けなど具体的な指導内容に関する不安である第Ⅰ因子「幼児への動機づけ、指導方法に対する不安」が高かったのは、このような対人退却傾向、関係調整不全傾向によるものであり、すなわち、彼らが子どもとの関係を開始、維持することに不安を持つだけでなく、指導を通じて関係性が深まった結果生じ得る困難を予測したことが一因であると考えられる。

第Ⅱ因子「自分自身のダンス技術に対する不安」は、自分自身の指導力に対する不安である。他者受容は、自己受容と正の相関関係があることが報告されており<sup>22)</sup>、他者受容が高い人は自己受容も高い。つまり、他者受容が高い人とは、他者に対して寛容であるだけでなく、自己の価値や能力をありのままに受け入れており、したがって、自己の指導力に関しても不安を感じにくいのではないかと推察される。

第Ⅳ因子「幼児の表現力、主体性の誘発に対する不安」については、幼児に由来する不安である。就学期前の子どもの活動は、「遊び」である。ロジェ・カイヨワは遊びの基本的な定義の1つに「自由な活動」をあげている<sup>23)</sup>。つまり、就学期前の子どものダンス活動も、「自由」な活動であり、子どもたちの数だけダンスの表現があると考えられる。他者受容は、「他者の内面やメッセージを受容する」能力である。他者受容の高い学生は、子どものありのままの「自由な表現」を受け入れる力が高い者であるといえる。したがって、子どもたちが自由に様々な表現したことをダンス指導と考えることが出来るため、幼児に対する指導不安が低いと考えられた。一方で、他者受容の低い学生は、他者の意見を理解したり受け入れる力が弱く<sup>14)</sup>、「遊びは自由である」と言葉では理解していたとしても、自分のダンス指導について確固たる枠組みを持つため、その枠組みから外れたものを、ダンス指導とみなすことが難しく、幼児がどのように表現するのか、その自由な表現や可能性に不安を感じているのではないかと考えられる。画一的な指導ではなく、自由な発想に基づいた、子どもの表現を引き出す指導を行うためには、ダンスを創作する過程において多様な他者の多様な考えに触れ、それらを受け入れる姿勢を養うことが求められる。

## V. まとめ

保育者養成校の学生を対象に、就学期前の子どもに対するダンス指導の不安感の構成要素と、ダンス指導における不安感と自己開示、他者受容の関連性について明らかにした。その結果、以下のようにまとめることが出来た。

・保育者養成校の学生におけるダンス指導不安は、第Ⅰ因子「幼児への動機づけ、指導方法に対する不安」、第Ⅱ因子「自分自身のダンス技術に対する不安」、第Ⅲ因子「自分自身の教材活用、指導力に対する不安」、第Ⅳ因子「幼児の表現力、主体性の誘発に対する不安」という4つの因子で構成される。

・ダンス指導不安と各自己開示レベルとの関連性については、趣味や最近楽しかった出来事などの表層的な自己開示を行う人は、第Ⅰ因子「幼児への動機づけ、指導方法に対する不安」、第Ⅱ因子「自分自身のダンス技術に対する不安」が低いという結果が得られた。

・他者受容とダンス指導不安との関連性については、他者受容力が高い者よりも低い者の方が、第Ⅰ因子「幼児への動機づけ、指導方法に対する不安」、第Ⅱ因子「自分自身のダンス技術に対する不安」、第Ⅳ因子「幼児の表現力、主体性の誘発に対する不安」を高く認識することが示された。

以上より、ダンス系科目担当者は、学生のこれらの特性を十分に理解した上で授業を展開していき、学生のダンス指導不安を軽減していく必要がある。

## 文献

- 1) 文部科学省：幼稚園教育要領解説. 223, 2018.
- 2) 池田裕恵・猪崎弥生：保育内容「表現」－からだで感じる・表す・伝える－. 杏林書院76, 2016.
- 3) 前掲2), 76-77.
- 4) 福武幸世・芝崎美和・渡部昌史：保育者養成校の学生を対象としたダンス指導の困難さと改善方法－A大学1年生を中心に－. 新見公立大学紀要42(2), 35-42, 2022.
- 5) 宮下恭子：学生のダンスや身体表現についての意識や自己評価に関する研究. 東京成徳短期大学紀要44, 1-16, 2011.
- 6) 塚本順子：ダンス授業の目的性に関する一考察. 天理大学学報203, 59-68, 2002.
- 7) 向出章子：ダンス授業における大学生の心理的変容の検討－対人関係に着目して－. 教育学研究論集15, 62-69, 2020.
- 8) 山口莉奈・正田悠・鈴木紀子・阪田真己子：体育科教員のダンス指導不安の探索的研究. 日本工学会論文誌41(2), 125-135, 2017.
- 9) Jourard, S.M.: A study of self-disclosure. Scientific American. 198(5), 77-82, 1958.

- 10) 榎本博明：青年期（大学生）における自己開示性とその性差について. 心理学研究58（2）, 91-97, 1987.
- 11) 榎本博明・清水弘司：自己開示と孤独感. 心理学研究, 63(2), 114-117, 1992.
- 12) 沢崎達夫：自己受容に関する研究-2男女大学生における自己受容の様相を中心として. カウンセリング研究 27(1), 46-52, 1994.
- 13) 高井範子：対人関係性の視点による生き方態度の発達研究. 教育心理学研究47, 317-327, 1999.
- 14) 上村有平：青年期後期における自己受容と他者受容の関連：個人志向性・社会志向性を指標として. 発達心理学研究18(2), 132-138, 2007.
- 15) 藤川順子・大本久美子：高校生の自己受容・他者受容と親との関わりの関連. 大阪教育大学紀要64(1), 81-92, 2015.
- 16) 丹羽空・丸野俊一：自己開示の深さを測定する尺度の開発. パーソナリティ研究18(3), 196-209, 2010.
- 17) 宮下恭子：ダンス・身体表現の指導に関する研究－保育者への調査より. 東京成徳短期大学紀要45, 67-77, 2012.
- 18) 井関文翔・岩田昌太郎：小・中学校教員におけるリズム系ダンス指導の悩み事に関する調査研究－性別・校種・ダンス指導歴および教職経験年数の差異をてがかりに－. 日本教科教育学会誌42(1), 65-74, 2019.
- 19) Sonstroem,R.J: Exercise and self-esteem. Exercise and Sports Science Review, 12, 123-155, 1984.
- 20) 竹元雅也：大学生のひきこもり親和性に自己受容・他者受容および社会的信頼が及ぼす影響. 応用心理学研究 47(2), 117-125, 2021.
- 21) 岡田努：現代大学生の「ふれ合い恐怖的心性」と友人関係の関連についての考察. 性格心理学研究10(2), 69-84, 2002.
- 22) 浦崎渉・石津憲一郎・本村雅宏：小中学校教師の他者受容に影響を与える要因－自己受容, 自己不一致, 自己愛的脆弱性および社会生活要因の視点から－. 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要15, 37-45, 2020.
- 23) ロジェ・カイヨワ, 多田・塚崎訳：遊びと人間. 講談社, 40, 1990.

